

日本の名作名文ハイライト

名人伝

中島敦

朗読 森下潤子

出所 朗読たんぽぽ <http://www.voiceblog.jp/junkoropin/> くことばの綿毛を飛ばそう

<http://www.voiceblog.jp/junkoropin/>

teabreak 編集

名人伝 中島敦

●冒頭部分

趙の邯鄲の都に住む紀昌という男が、天下第一の弓の名人になろうと志を立てた。己の師と頼むべき人物を物色するに、当今弓矢をとつては、名手・飛衛に及ぶ者があるとは思われぬ。百歩を隔てて柳葉を射るに百発百中するという達人だそうである。紀昌は遙々飛衛をたずねてその門に入った。

飛衛は新入の門人に、まず瞬きせざることを学べと命じた。紀昌は家に帰り、妻の機織台の下に潜り込んで、そこに仰向けにひっくり返った。眼とすれすれに機躡が忙しく上下往来するのをじっと瞬かずに見詰めていようという工夫である。理由を知らない妻は大いに驚いた。第一、妙な姿勢を妙な角度から良人に覗かれては困るという。厭がる妻を紀昌は叱りつけて、無理に機を織り続けさせた。来る日も来る日も彼はこの可笑しなかつこうで、瞬きせざる修練を重ねる。二年の後には、遽だしく往返する牽丁が睫毛を略めても、絶えて瞬くことがなくなつた。彼はようやく機の下から匍出す。もはや、鋭利な錐の先をもつて脛を突かれても、まばたきをせぬまになつていた。不意に火の粉が目に入ろうとも、目の前に突然灰神楽が立とうとも、彼は決して目をパチつかせない。彼の脛はもはやそれを閉じるべき筋肉の使

用法を忘れ果て、夜、熟睡している時でも、紀昌の目はカッと大きく見開かれたままである。ついに、彼の目の睫毛と睫毛との間に小さな一匹の蜘蛛が巣をかけるに及んで、彼はようやく自信を得て、師の飛衛にこれを告げた。

それを聞いて飛衛がいう。瞬かざるのみではまだ射を授けるに足りぬ。次には、視ることを学べ。視ることに熟して、さて、小を視ると大のごとく、微を見ること著のごとくなつたならば、来って我に告げるがよいと。

紀昌は再び家に戻り、肌着の縫目から虱を一匹探し出して、これを己が髪の毛をもって繫いだ。そうして、それを南向きの窓に懸け、終日睨み暮らすことにした。毎日毎日彼は窓にぶら下つた虱を見詰める。初め、もちろんそれは一匹の虱に過ぎない。二三日たつても、依然として虱である。ところが、十日余り過ぎると、気のせいか、どうやらそれがほんの少しながら大きく見えて来たように思われる。三月目の終りには、明らかに蚕ほどの大きさに見えて来た。虱を吊るした窓の外、風物は、次第に移り変わる。熙々として照っていた春の陽はいつか、烈しい夏の光に変わり、澄んだ秋空を高く雁が渡って行ったかと思うと、はや、寒々とした灰色の空から雲が落ちかかる。紀昌は根気よく、毛髪の先にぶら下つた有吻類・催痒性の小節足動物を見続けた。その虱も何十匹となく取換えられて行く中に、早くも三年の月日が流れた。

ある日ふと気が付くと、窓の風が馬のような大きさに見えていた。占めたと、紀昌は膝を打ち、表へ出る。彼は我が目を疑った。人は高塔であった。馬は山であった。豚は丘のごとく、雞は城楼と見える。雀躍して家にとって返した紀昌は、再び窓際の風に立向い、燕角の弧に朔蓬の幹をつがえてこれを射れば、矢は見事に風の心の臓を貫いて、しかも風を繋いだ毛さえ断れぬ。

紀昌は早速師の許に赴いてこれを報ずる。飛衛は高踏して胸を打ち、初めて「出かしたぞ」と褒めた。そうして、直ちに射術の奥儀秘伝を剩すところなく紀昌に授け始めた。

目の基礎訓練に五年もかけた甲斐があつて紀昌の腕前の上達は、驚くほど速い。

奥儀伝授が始まってから十日の後、試みに紀昌が百歩を隔てて柳葉を射るに、すでに百発百中である。二十日の後、いっばいに水を湛えた盃を右肱の上に載せて剛弓を引くに、狙いに狂いのないのはもとより、杯中の水も微動だにしない。一月の後、百本の矢をもって速射を試みたところ、第一矢が的に中れば、続いて飛来った第二矢は誤たず第一矢の括に中って突き刺さり、更に間髪を入れず第三矢の鏃が第二矢の括にガッシと食い込む。矢矢相属し、発発相及んで、後矢の鏃は必ず前矢の括に食入るが故に、絶えて地に墜ちることがない。瞬く間に、百本の矢は一本のごとくに相連なり、的から一直線に続いたその

最後の括はなお弦を銜むがごとくに見える。傍で見ていた師の飛衛も
思わず「善し！」と言った。

二月の後、たまたま家に帰って妻といさかいをした紀昌がこれを威
そうとて烏号の弓に慕衛の矢をつがえきりりと引絞って妻の目を射
た。矢は妻の睫毛三本を射切ってあなたへ飛び去ったが、射られた本
人は一向に気づかず、まばたきもしないで亭主を罵り続けた。けだし、
彼の至芸による矢の速度と狙いの精妙さとは、実にこの域にまで達し
ていたのである。

もはや師から学び取るべき何もものもなくなった紀昌は、ある日、ふ
と良からぬ考えを起した。